

問屋型の産業類型を、商人から工業家へという第二の道としてとりあつかい（私の『諸研究』の129—134頁参照）、さらにすぐつづいてこれに對し、次のような運動を對比させた。すなわち、リヴァリー・カムパニーの（從屬的な）「ヨーマンリー」を構成する職人の列伍からの商人製造業者雇主の階級の擡頭や、これらの要素（それについてアンウィンが書いている）よりなる新しいステュアート・コーポレーションの挑戦の形をとってあらわれた運動がそれである（134—48頁）。このような問屋制度の下からの組織形態が、とくにイギリス的な現象なのか、それとも大陸にもこれに平行する現象があるのか、これについては、私は敢て獨斷的な意見を述べることは差し

控えなければならない。ここでは、私は、次のことを示唆しうるだけである。それは、大規模な資本主義的企業家ばかりを探し求めたということが、ことによると大陸の歴史學者たちをして、小さななりあがり型の商人製造業者たちが果した役割に對して、めくらにしてしまったのかもしれないということか、問屋制度の本當の姿は、ドイツにおいてさえ、ドイツの經濟史家たちが述べているほど體系的にまとまったものではないかもしれないということである。われわれは、もう一度、高橋教授が言われるような、各國でのそのような諸問題の研究における「共同的な前進」に懇えねばならない。

高橋教授ならびにドップ教授の批判に答えて

ポール・M・スウィージー

私が初めてドップの『資本主義發展の諸研究』をとりあげたとき、いちばん私を困らせた問題は、簡単にいえば、次のようなものだった。すなわち、中世初期には、西ヨーロッパの至るところにドップが36—37頁で適切に記しているような封建制度が存在した。この生産様式は、ひとつの發展過程を経て危機と崩壊に到達し、そして資本主義によってうけつがれた。形式的にいえば、資本主義と人間の一生との類比——發展、一般的危機、社會主義への移行——は非常に密接なものがある。ところで、私は、資本主義の場合における主たる推進力の性質は何か、それが生みだす發展過程が何故に危機に導くのか、そして社會主義が何故に必然的に後續の社會形態であるのか、ということについてはかなりうまい考えをもっている。しかし私はドップの書物にとりかかったときには、封建制の場合におけるこれらの要因のいずれについても、いっこうにはっきりしていなかった。私はその解答を求めていた。

私がドップの書物にいちばん感謝している點は、それを讀みおわったとき、私のこころのなかで、これらすべての疑問が以前より非常にはっきりしたとおもわれたことである。これは一部分はかれが私をうまく納得させてくれたためであり、また一部分は私が他の資料をのぞき

こみそして私じしんの資料について若干改めて考えなおすように刺戟してくれたためだった。『サイエンス・アンド・ソサイアティ』の私のもとの論文は、私がすでに到達していた試案的な解答についてのひとつの報告というような性質のものだった。（ついでながら、私は、このことをもっとはっきりさせておくべきだったとおもう。ドップは、もちろん、かれ流にかれの問題を定式化した。そして、かれは私が解答を求めていた疑問とは——たとえ関係があったとしても——ほんの間接的に関係があるだけのものに多くの關心を寄せた。そこで、私の「批判」の若干は本當はなんら批判にならなかった。これらの批判は補足的な示唆や假説として提出すべきであったのだ。）

ドップは、その『回答』のなかで、私の解答と一致しないいろいろな點を指示し、また高橋は、もし私がかれを正しく理解しているとすれば、私の回答を殆んど頭から排撃している。しかし私は、ドップの返答（もちろん私の疑問にたいする）が何かということについては、かれの書物を讀みおわったときにわかった以上にはほとんどわからないし、さらに高橋の返答が何かということについてはなにもわからないに等しい。だから、私は、この與えられた再答辯の機會を利用して、いくつかの私の

疑問とその回答をできるだけ簡略に、かつドップや高橋からもっと別の定式化をひきだせるかもしれないような形式で、再び述べてみたい¹⁾。

第一の疑問 西ヨーロッパ封建制の発展の背後にある主たる推進力は何であったか?²⁾

資本主義の場合においては、われわれは、この疑問にはっきりとなんら疑念をさしはさむことなく、答えることができる。そこでの主たる推進力は、資本家的占有過程の構造そのものに固有な資本の蓄積である。封建制の場合においても、何かこれと類比されるようなものがあるだろうか?

ドップの理論は、封建領主の収益必要の増加のなかに、類比を見出す。かれの見解にしたがえば、「なによりもまず、封建制の没落の原因となったものは、支配階級の収益必要の増加に結びついていた生産組織としての封建制の無力であった。というのは、この追加収益の必要が生産者にたいする圧力の増大を、それが文字通り耐えられなくなるところまで、促進したからである」(『諸研究』42頁)。その結果、「それはついにその組織を育てあげた労働力の涸渇もしくはその現実の消滅に導くことになった」(43頁)。問題は果して封建領主の収益必要の増加——その事實は疑う餘地がないのだが——が封建的生産様式の構造に固有なものとして示され得るかどうか、ということである。私は、およそこのような関係が存在することを疑うにたるいくつかの理由を述べておいた(『移行』138—140頁)。そして、封建領主の収益必要の増加が、いかに容易に、商業と都市生活の成長の副産物として、説明され得るかということを示した。

ドップは、この主題について私が強調したことに、がまんがならないようだ。かれにしたがえば、私は、封建

1) 以下において私はドップの書物を『諸研究』、私の雑誌論文を『移行』、ドップの回答を『回答』、そして高橋の論文を『寄書』と記すことにする。

2) 私はことさらに西ヨーロッパの封建制について言うことにする。というのは、けっきょくにおいて西ヨーロッパに起ったことは、封建的生産様式が広くおこなわれていた世界の他の部分で起ったこととは、明らかに非常に違っていたからである。これがどの範囲まで異った封建制度のあいだの変異に起因しているのか、またそれがどの範囲まで「外的」諸要因に起因しているのかということは、もちろん、きわめて重要な問題である。けれども、私はそれらの問題に答え得るとは敢て言わないから、私がやると言い得ることは、私の關心を西ヨーロッパに限ることだけである。しかし、そうすることによって、私は他の封建制が別個の發展法則にしたがうものだと考えるというわけではない。私はこの問題を全く避けたいとおもう。

制の發展は「内的な相剋かそれとも外的な力かどちらかの問題だ」とおもっているかにみえるようである。「これは私には餘りにも單純化された——機械的でさえもある——いいかたのようにおもわれる。私はそれを、これら二つのものの相互作用とみている。もっとも、ここで主な力點が内的矛盾におかれていることは事實であるが、これらの矛盾はいかなる場合にも(時間的には非常にあとさきがあるとしても)作用するし、またそれらは外的影響が及ぼす効果の特殊な形態と方向を決定すると考えられるからである」(『回答』160頁)。

歴史的には、もちろん、ドップは全く正しい。封建制の發展の徑路を決定したものは、内的要因と外的要因の相互作用であった。そして、私はそのことを決して否定するつもりはなかった。しかし、同じことは資本主義の歴史的發展についてもいえる。つまり、それは、その組織内の主たる推進力をわれわれが探求することを妨げないひとつの事實である。したがって、私は、ドップが私の封建制に関する問題の定式化を「機械的」と言うのは正しいとは決しておもえない。それは理論的な問題であって、私は今でもそれが封建制の全體的分析にとって、決定的であると信じている。

さきの引用の後半は、ドップが問か答かをきっぱりと述べることをためらっているにもかかわらず、かれがこの問題について、じじつひとつの立場をとっていることを、はっきりと示している。その立場は、私がまさにかれの書物を基礎としてかれがもっていると考えるものであって、つまり封建制はひとつの内的な主要推進力をもっているという立場である。けれども、かれがなんら新しい論據を引證していないので、私は依然として納得できないでいるわけである。

私がみる限り、高橋は、この問題の解明に大して貢献していない。封建制の諸要素についてのかれの興味深い分析(『寄書』318—319頁)は、かれにこの制度の「法則と傾向」をなんら定式化させることにはならず、そこで、かれがとくにこの問題について語る時、結果は少くとも私にとっては、大して教えられるところがないのである。封建社會においては——かれは書いている——「生産手段は生産者と結びついており、生産力は直接生産者じしんの生産力として發展する(莊園制度の崩壊と小規模零細農業の發展、貨幣地代の形成、地代率低下の傾向、領主的危機)。したがって、封建制における發展法則は農民じしんの解放と獨立の方向に導かれるにすぎない(同上、334頁)。ここでは、生産力の上昇が決定的な要因としてとりあつかわれているが、生産力の上昇が封建制に固有な特質であるということは、なんら自明の

ことではない。じじつ、まさにそれとは反対の假説を示唆する非常に多くの當代の歴史的な證左がある。ここでもまた、ドップのいわゆる封建領主の収益必要の増加の場合と同様に、われわれは、封建制度にとって外的な力の影響という問題に當面すると私にはおもわれる。

外的な力のこのすべての問題に關して、高橋は、私をひどく非難して、こう言っている。すなわち、「スウィーヂーは、特定の社會構造の解體をその生産力の自己運動の結果としてとらえることなく、かえってひとつの「外的な力」を探しもとめている。もしも歴史の發展が外的な力によって起るものというならば、これら外的な力は、どのようにして生じ、また、それはどこからきたのか、という疑問が依然として残る」(『寄書』325頁)。あとのほうでかれが述べている點は、もちろん、妥當なものであって、私はそれを否定するつもりは毛頭ない。一組の社會關係に關して、外的である歴史的諸力は、もっと廣汎な一組の社會關係に關しては、內的である。そして、西ヨーロッパの封建制の場合にはその通りだった。都市と市場の成長をともなう商業の擴張は、封建的生産様式³⁾にとっては外的だったが、しかし、それはすべてのヨーロッパ=地中海經濟に關する限り內的だった。

西ヨーロッパの封建制の徹底的な研究——ドップはもちろんそれを提供するとはいっていないが——をやろうとすれば、このいっそう廣汎なヨーロッパ=地中海經濟との關連において、それを分析しなければならなかったろう。どのような方法でこれがなされ得るかということは、ピレンヌによって見事に示されている。すなわち、かれは、第一に、西ヨーロッパにおける封建制の起源は、古代世界の眞の貿易中心からあの比較的小くれた地方が(7世紀のアラビア人の膨張によって)隔離されたということの中に求められなければならない、第二に、その後

3) ドップが都市の成長は內的な封建過程であると「ある程度まで」信じていると言うとき(『回答』161頁)、私はかれの推理を理解することができない。もとよりこのことに關連してドップが引用した事實——封建制が都市に遠隔地商業の必要を充たすように促進したという——は、この點を證明するものではない。ひとは封建的支配階級が都市を建設することに主導権をとり、そしてこれらの都市を首尾よく封建的な財産所有および労働關係の組織につくりあげたということを證明すべきであつたらう。疑いもなく、若干の都市の場合にはこういうことが起つたが、私には、ピレンヌが、決定的な商業中心は典型的な場合には、全く異つたしかたで成長したことを、結論的に示しているようにおもわれる。しかし、とくに都市の非封建的な性格を示しているものは、農奴制の一般的缺如だった。

4) ピレンヌの『中世ヨーロッパの經濟・社會史』の

の封建制の發展は、これら崩壊した商業紐帶⁴⁾の再建によって決定的に實現されたと論じた。このようにみても、10世紀以後の商業の成長は、あきらかに、私が「探しもとめている」と高橋が全く間違つて非難するような神祕的な外的な力では決してなかつた。しかし、關心が封建制それじたいに狭く集中される場合には、——ドップが全く正しくやったように——商業の成長を外的な力としてとりあつかふことは、正當であるばかりでなく、理論的に必須のことと、私にはおもわれる。

そこで、第一の疑問にたいする回答は、私にはこのようにおもわれる。すなわち、封建制度はなんら內的な主要推進力をもつものではなく、それが眞の發展——封建制の基礎的な構造を左右しない單なる動搖や危機とははっきりと區別される——を遂げるとき、そこでの推進力は、その制度の外に求めらるべきである。(私は、これが單に西ヨーロッパだけでなく、かなり一般的に封建制度にあてはまるものか疑問におもっている。しかし、これは現在の論争範圍を逸脱する問題である。)

第二の疑問 西ヨーロッパにおける封建制の發展は何故に危機とそして最後には崩壊に到達したか?

外的な主要推進力とその發展過程の背後にあると決定した以上、われわれは、もちろん、この疑問にたいする回答が、封建制の構造にたいするこの外的な力の衝擊の中にもとめられるべきだという結論に達せざるを得ない。換言すれば、ドップが正しく主張してのように、この過程は一種の相互作用である。そして、高橋もこれに異論はなかりとせよ。したがって、ここに基本的な相異は少しもない。この點に關して、ドップと高橋の兩者にたいする私の主な批判は、かれらが封建制の没落における一要因としての商業の重要性を過少評價せんとするあまり、この相互作用の過程を直接分析することを避けているということである。例えば、かれらのどちらも、賦役労働すなわち現物支拂から貨幣地代への代替を、主として形式のことがらとしてとりあつかおうとしており、そこでいきおいこの轉換が發達した商品生産の基礎の上にたつてのみ、かなり大規模に起り得るのだという事實を見失なうことになる。この相互作用の過程をとりあつかおうとする私じしんの努力とその結果は、私のもとの論文(『移行』141—147頁)に示されている。そこには、むしろ、多くの弱點——例えば、ドップが批判しているいわゆる「第二農奴制」のとりあつかひにみられるよう

ほかに、かれの『マホメットとシャルマーニュ』を参照。後者は著者が古代の終末と西ヨーロッパにおける封建制の擡頭の問題をもっとも詳細にとりあつた遺著である。

な——があるであろうが、しかし、私はあの論文がひとつのはっきりした理論的分析であるという取柄をもつものであると、今でもおもっている。だれかがそれをもっとよいものにして欲しいものである。

第三の疑問 封建制は何故に資本主義によってうけつがれたか？

もしもひとが、私のように、ドップの説——14世紀から16世紀末までの時期は封建制が十分に衰退しており、しかもなお資本主義の最初の芽生えしかなかった時期であったという——に同意するならば、上記の疑問は眞に困難なものになる。例えば、ひとは社会主義のもとにおいてはじめて維持されさらに発展させられる生産力を資本主義がつくりだしているとはっきりとすることができるが、それと同じようには、資本主義のもとでだけ維持されさらに発展させられる生産力を封建制がすでにつくりだしていたと言うことはできない。もとより封建制の没落は商品生産の普遍化をともなった（私は、むしろ、それによって「ひきおこされた」と言いたいのだが）。そして、マルクスがしばしば強調したように「商品生産と發達した商品流通すなわち商業がそれ〔資本〕の生じる歴史的な前提をなす」（『資本論』第1巻163頁）のである。しかし、歴史的な前提は、それじしんでは十分な説明を提供するものではない。いずれにしろ、古代世界は高度に發達した商品生産によって特徴づけられたが、決して資本主義を生みだすことはなかった。さらに、中世後期のイタリアやフランドルにみうけられるはっきりとした資本主義の芽生えは、實を結ぶことがなかった。それならば資本主義は、何故、16世紀後半に、ことにイギリスで、やっと受けいれられ、そして眞に發展することになったのか？

私はまさかドップがかれじしん最後の解答を與えたのだと主張しはしないとおもうが、かれは、この問題に非常に多くのあかりを投げかけている。かれの力點の多くは、産業資本家が發展するためのマルクスのいわゆる「眞に革命的な道」におかれているが、ドップはこれを小生産者の列伍からのこびとたちの擡頭を意味するものと解釋している。私は、もとの論文で、このようなマルクス解釋を批判したが、しかしドップの回答に接し、なおじぶんでももっと反省してみた結果、私はドップのそのような解釋が、考え得る唯一の解釋ではないが、しかしそれはやはり實り多き方向を指示する正當な解釋であるという結論に到達した。いま必要なものは、産業ブルジョワジーの起源についての、もっとも史實に即した探求であるようにおもわれる。この種の探求はなにもものにもまして、16世紀末以後の資本主義の決定的な擡頭

についての秘密をときあかすことを企てねばならないだろう。

この問題に關する高橋の立場は、私には、いっこう明らかではない。かれは15・6世紀を過渡的とよぶことは行きすぎであるとドップを批判している。おそらく、かれはこう考えているのだろう。すなわち封建制は資本主義が擡頭してそれを廢止するまでは本質的にはそのまま残存しており、したがって封建制の没落と資本主義の擡頭との二つの過程のあいだには、ドップや私がともに主張しているような分離はなんら存在しないのだ、と。もしそうだとすれば、列伍から小生産者が擡頭したことの革命的な重要性を説く點で高橋がドップと同意見であることは疑いがない。そして、この現象の性格や範圍についてもっと史實に即した探求を緊急と考える點で、私とも同意見であるとおもわれる。

最後にこれに關連してひとつの問題點。15・6世紀が「封建的でもなく未だなお資本主義的でもな」かった（『諸研究』19頁）らしいというドップの示唆を發展させて、私はその時期を前資本主義的商品生産と名づけることを提案した。しかし、ドップは、この時期の社會を「高度の分解段階の」（『回答』162頁）封建制社會という考えをとって、この提案を排撃した。かれは言う。「スウィージーがあきらかにとりあげなかった決定的な問題は……こうだ。この時期の支配階級は何であったのか？……それが資本家階級であったということとはあり得ない。……もしも商人ブルジョワジーが支配階級をなしていたとすれば、それでは國家はある種のブルジョワ國家であったにちがいない。そして、もしも國家がすでにブルジョワ國家であったとすれば、……17世紀の内亂の本質的な争點は何であったのか？それがいわゆるブルジョワ革命であったということは（この見解にしたがえば）あり得ない。われわれは、それが既存のブルジョワ國家權力にたいして國王や宮廷が演じた反革命の試みにたいするひとつの闘争であったという……ようなある種の想定にしたがわざるを得ない。……もしもわれわれがいま述べたような一方の見解をとらないとすれば、われわれは、支配階級はなお封建的であり、國家はなおその支配のための政治的な道具であったという（私が正しいものと信じている）見解をとらざるを得ない」（『回答』162—163頁）。

これらのことは、今日數年間にわたって、イギリスのマルクス主義者たちが熱心に討論してきた問題であって、そのことを私はよく知っている。そこで、私がそれについていやしくもなにか意見を述べるというようなことは、慎重を缺くことになろう。したがって、私は、私の論評

をひとつの質問のかたちでださせていただきたい。問題になっている時期には、相異った財産所有形態に基礎をおいて、支配のためではないとしても優越のために、多少とも継続的に闘争をやっていた支配階級が、ひとつではなくて、いくつかあったというドップのとりあげていないもうひとつの可能性が、どうしてないのだろうか？と。

もしもこの假説をとりあげるならば、われわれはエンゲルスからのあの有名な文句にしたがって、その時期の國家を解釋することができる。「ある時期には、例外的に、相斗う諸階級が互いに非常に緊密に均衡を保ち、そのため公權力がそれらの階級のあいだの調停者をよそおって、ある程度の獨立を得るようなことがある。17・8世紀の絶對王制はそのようなひとつの立場にあったのであり、そこでは貴族と市民階級の力を互いに均衡せしめて

いた⁵⁾。」

このように解釋すると、あの内亂は、それが資本家階級に國家を掌握させ、そしてその他の階級にたいする決定的な優越を達成させたというまっとうな意味でのいわゆるブルジョワ革命だったということになる。

私は、ドップならびに高橋に、封建制と資本主義の移行の時期における支配階級の問題についてのこの回答にたいし、いったいどのような異論があるのかとおたずねしたい。

5) 『家族の起源』カー版、209頁。エンゲルスは、あきらかに大陸のことを考えていた。イギリスの場合にはその時期はもっと早かった。

(本田創造譯)